彫刻家・金子九平次ゆかりのブールデル美術館館長と長女の木島洋子氏の面会が実現した。

ブールデル美術館のアメリー・シミエ館長と木島洋子氏

令和元（2019）年 11 月 23 日、パリ市立ブールデル美術館のアメリー・シミエ館長が、福島県で開かれたシンポジウムに出席するために来日。九平次の長女である木島洋子氏、御田教会長金子惠先生と面会する運びとなった。

シミエ館長は「ブールデルはカトリックの信者であり金光教を信仰していた九平次には親近感を抱いていたと思う。九平次の作品は、大変優美で、フランスにおいて、現代作家の木彫作品として貴重な存在だ」と評価した。

（「金光新聞」2019 年2月 24 日号より一部抜粋）

紅型染作家木島洋子は、父金子九平次と母ウメの長女として昭和７（1932）年に誕生する。

１日中アトリエで仕事をしている父の姿を、見て育ったという。洋子は、富士宮の高等女学校から静岡大学に進学し美術の教師になり、紅型染も始めた。現在は、紅型染作家として活躍。

紅型織物工芸舞踊と沖縄がもてる民芸称えてつきぬ
金光碧水（初代館長）詠歌

生活にとけこめし沖縄の工芸を称え尊び語る※リーチ氏
金光碧水（初代館長）詠歌

文化とは、人間の生きた生活の中から生まれてくるものであり、その命の喜びが表現されたものである。命の輝きを表現した作品。

中山亀太郎師が足の指で作った紙細工物

生活と離れて美を求むるは間違いなりと※リーチ氏のいふ
金光碧水（初代館長）詠歌

暮らしからいづる自然の美しさこの美しさたいせつなりと
金光碧水（初代館長）詠歌

金光教教師・中山亀太郎（1905～2005）

明治 38（1905）年　岡山県都窪郡中庄村生まれ。
４歳の時、鉄道事故で両手片足を失う。
大正 13（1924）年　金光中学卒業
昭和 15（1940）年　金光教青年会寄宿舎主事に任命
昭和 34（1959）年　金光教東京寮主事後、寮鑑に任命
平成 17（2005）年　没 99 歳

中山亀太郎師が、講演会のため広島県を訪れた時、女学生だった金光教吉舎教会教会長の娘の井上萌子氏に、タバコ箱の中紙を、足で細工した物を贈ったという。萌子は、60 年以上大切に保存していた。

※バーナード・リーチ
イギリス人の陶芸家で大英国勲章、国際交流基金賞を受賞している。
民芸館の設立にあたり、柳宗悦に協力した。
初代館長は、昭和 36（1961）年 11 月 13 日倉敷大原美術館の陶器館の開館式に出席し、バーナード・リーチに会い、話を聞いている。

金光図書館所蔵品展 ２０２０

彫刻家・金子九平次（かねこくへいじ）と紅型染作家（びんがたぞめ）・木島洋子（きじまようこ）親子の作品を中心に

『春愁（しゅんしゅう）』と金子九平次
大正 10（1921）年９月 27 日撮影

初代金光図書館長でもあった金光鑑太郎は、文化を大切にした人でした。では、文化とはなんでしょうか？

それは、庶民の生きた生活、その生活の実態の中から生まれてくる、生きる喜びのしみこんだ生活の仕方、それを四角ばらず真実に表現することではないでしょうか。

初代館長は、文化人や芸術家たちとの交流、ご自身の信心生活をすすめる中で、日常の生きる喜びのしみ込んだ生活の仕方そのものが文化であると捉えられたように思われます。

この度の展覧会で、作品に宿る信心の喜びや美しさに触れることで、見る人も命が生き生きと輝いていく、そうした信心の広がりや喜びを味わってください。

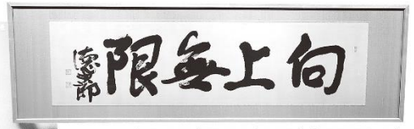
場　所　金光図書館　第１展示室
期　間　令和２年４月～令和３年２月

浅口市金光町大谷 320 番地
（0865）42－2054
konko-library@konkokyo.or.jp

■第2展示室

金光図書館初代館長が撮影した
著名人のポートレート展

▶初代館長が愛用したカメラ



金森氏の自筆「向上無限」（昭和32年作）

憲法学者
金森 徳次郎
（1886～1959）

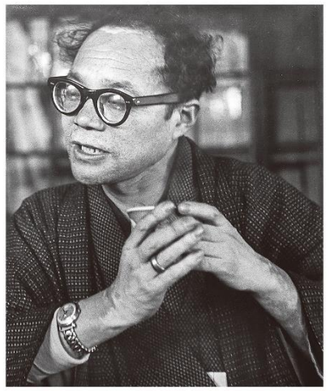
図書館10周年で講演
その人柄を館長が歌に

憲法学者の金森氏は、昭和9（1934）年、岡田啓介内閣の法制局長官、同21（1946）年、第1次吉田茂内閣の憲法担当国務大臣を務めた。吉田内閣では、日本国憲法の制定に当たり、第90回帝国議会での新憲法草案に関する政府側のほとんどの答弁を担当するなど、多大な貢献をした。

同23（1948）年、金森氏は国立国会図書館初代館長に就任した。それが機縁となって、金光図書館の金光鑑太郎初代館長との交流が始まった。

金森氏は、同32（1957）年5月5日に開催された、金光図書館開館10周年記念式に招かれ、「向上無限」と題する記念講演を行っている。

講演の中で、「春風（しゅんぷう）をもって人に接す」という江戸時代の儒者、佐藤一斎の言葉を、金森氏自らの座右の銘としていることについて触れた。金光鑑太郎館長は、その内容とともに金森氏の人柄に感銘を受け、「なつかしき慈顔の口の動くままにこぼるる話春風（はるかぜ）のごとし」「春風に似たるこころを持ちたしと吹く春風に吹かれつつ思ふ」と、「春風」を主題とした短歌5首を詠んだ（春風五首）。



版画家
棟方 志功（1903～1975）

棟方氏による書「妙」（製作年月日不明）

館長の招きで金光に滞在、共同で作品も

版画家の棟方氏は、20世紀の美術を代表する世界的巨匠の一人と称される。青森市に生まれ、少年時代にゴッホの絵に出合い感銘を受けたことから画家を志したが、後年、木版画に転向した。人間本来の素朴な情念を、宗教観や宇宙観を織り交ぜながら、ダイナミックに表現した。

代表作は、「二菩薩釈迦十大弟子」など多数。

柳宗悦が創唱した民芸運動の関係者と交流していた棟方氏が、昭和21年に民芸運動に関わる催しで岡山県倉敷市を訪れた際、金光鑑太郎初代館長と出会い、鑑太郎館長の招きに応じて金光図書館を訪問。その後約半年間、金光に滞在した。

金光滞在中、霊地在住の人の求めに応じて製作した作品が金光図書館に残っている他、鑑太郎館長との合作も残した。棟方氏と鑑太郎館長が、金光図書館館長室で作品製作に取り組んでいたところ、その最中に天王堂菓店の出来立てで熱々のカステラが届けられ、二人で手でちぎって食べながら歓談していた、というエピソードが残っている。

旧金光図書館館長室で初代館長・金光鑑太郎（かがみたろう／四代金光様）様の後ろに飾られた金子九平次氏の作品（昭和25年ごろ）。右が「春愁」（木彫、大正10年作）。左が「をどり」（木彫、昭和11年作）

金光図書館所蔵品展2020

金光図書館第1展示室がリニューアル

金光図書館には、金光鑑太郎様（後の四代金光様）が初代館長であった時から集められた、さまざまな資料や作品が収蔵されている。今春、本部総合庁舎1階の第1展示室が彫刻家・金子九平次（くへいじ）氏と、長女で紅型染（びんがたぞめ）作家・木島洋子氏親子の作品を中心にリニューアルされた。

隣の第2展示室には、初代館長自ら撮影した、交流のあった芸術家らの肖像写真と、その芸術家たちの作品が並べて展示されている。

金光英子館長は「信心の喜びを形に現わした作品に触れることで、見る人も命が生き生きと輝いていく、そうした信心の広がりや喜びを味わってほしい」と話している。

「少女像」
（ブロンズ像、昭和43年作、金光学園所蔵）
金子九平次氏最後の作品と言われている。母校である金光学園に寄贈。同作品は東京国立近代美術館も所蔵している

作品に宿る信心の喜び
芸術に触れ輝くいのち

彫刻家
金子 九平次
（1895～1968）

金光教ゆかりの彫刻家・金子九平次氏は、明治28（1895）年に生まれた。父は東京都御田教会初代教会長の金子吉蔵師で、宮大工の彫刻家でもあったため、金光教本部の大教会所建築にも尽力した。その後、大教会所は火災によって多くを焼失したが、吉蔵師が手掛けた正門が境内に現存している。

九平次氏は金光中学校（現金光学園中学・高等学校）を卒業後、大正から昭和初期に活躍した長谷川栄作に彫刻を学び、大正10（1921）年、26歳の時に第3回帝国美術院展覧会に「春愁（しゅんしゅう）」が入選。翌11年、三代金光様のご支援のもと渡仏した後は、アントワーヌ・ブールデル（1861～1929）に師事し、多くの作品を世に送り出した。

大正15年に帰国後、国画創作協会の彫刻部会員となり、昭和12年、新古典美術協会を創立主宰するなど活躍した。また、宗教と芸術の重要性を感じていた九平次氏は、本教信徒の参加を得ながら展覧会を開催するなど、金光教における芸術運動にも情熱を注いだ。

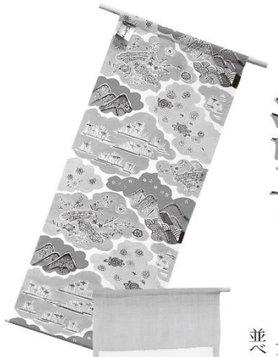
なお、代表作の一つ「春愁」は九平次氏がフランスに渡る際、お世話になった三代金光様にお供えされ、当初は金光家の玄関に飾られていた。現在は、本部総合庁舎1階ホールに展示されている。

本教とも関係の深い
日本を代表する彫刻家

「萌え出づる春」
（木彫、大正11年作）
パリ留学前に制作

「夢みる人」
（ブロンズ像、制作年月日不明）

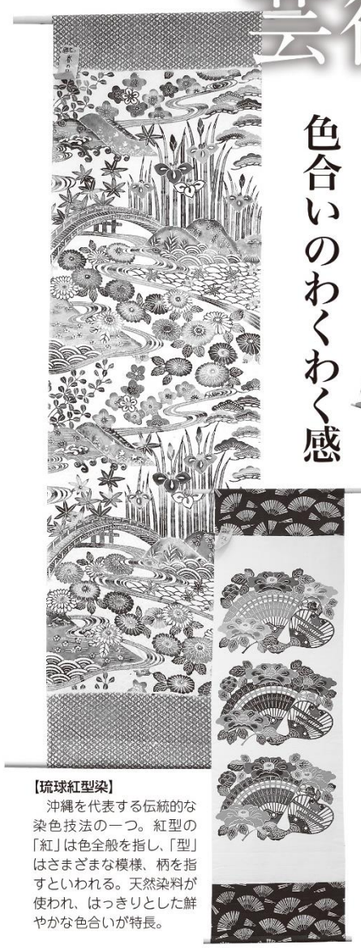
紅型染作家
木島 洋子（88歳）



色合いのわくわく感
皆さんにも感じてほしい

木島氏は幼い頃から、1日中アトリエで仕事をしている父・金子九平次氏を見て育った。現在、紅型染作家として活躍し、ご霊地に参拝する際には、自身が作成した紅型染の琉球紅型を金光図書館などに寄贈されている。今回の所蔵品展に当たり、次のように話している。

「父の作品と、私の琉球紅型の作品を並べて展示して頂き、ありがたいことと思っています。紅型作りにはたくさんの工程があり、とても時間がかかりますが、一つ一つの工程を丁寧に取り組むことに面白さを感じます。水で洗い、仕上がった時、想像した以上のきれいな色合いになる時があり、今度はどんな色になるんだろうかと、毎回このわくわく感を楽しんでいます。皆さんにもぜひ感じてもらえたらと思います」



【琉球紅型染】
沖縄を代表する伝統的な染色技法の一つ。紅型の「紅」は色全般を指し、「型」はさまざまな模様、柄を指すといわれる。天然染料が使われ、はっきりとした鮮やかな色合いが特長。